

西陲發現淮南子時則訓小考

藤井律之

はじめに

ロシア・サンクトペテルブルグのロシア科學アカデミー東洋寫本研究所在所蔵する寫本 $\text{Dx}17463$ は、『俄藏敦煌文獻』（上海古籍出版社）17 冊において、『禮記』月令に比定されている。それに対して許建平氏は、 $\text{Dx}17463$ を『禮記』月令ではなく、 $\text{Dx}7892 \cdot \text{Dx}3936$ と「性質相同」の寫本とされた。

その $\text{Dx}7892 \cdot \text{Dx}17463$ とは、許氏によれば、『呂氏春秋』十二紀、『逸周書』時則解、『大戴禮記』夏小正、『禮記』月令、『淮南子』時則訓、「唐明皇御刊定禮記月令（唐月令）」のいずれとも異なる「月令」であるという。つまり現存の典籍には同定しうるものがない、と判断されたわけである。また、 $\text{Dx}7892 \cdot \text{Dx}17463$ は同一巻であるが、 $\text{Dx}17463$ は巻を異にするとも指摘しておられる¹。

しかし厄介なことに、現在サンクトペテルブルグの東洋寫本研究所在所では、上述の $\text{Dx}17463 \cdot \text{Dx}7892 \cdot \text{Dx}3936$ のほか、 $\text{Dx}236$ もあわせて『淮南子』に比定されている。さらに、實見された高田時雄氏によると、これら四種—— $\text{Dx}17463$ は I と II に分かれているので、計五個の寫本の斷片は、一枚のアクリル板に挟まれて保管されているとのことで、東洋寫本研究所在所では、これらを同一の寫本と見なしていることになる。

筆者も、 $\text{Dx}17463$ をはじめとする寫本群は『淮南子』時則訓と考える。管見の限り、西陲出土の『淮南子』寫本はこれら以外には存在せず、それだけでも十分貴重な資料といえるが、これらの寫本に含まれる雙行注の内容はさらに重要である。しかし、これらの寫本の釋文を提示し、内容を検討した先行研究はやはり管見の限りみあたらない。よって、本稿はこれらの寫本に對する釋讀を含めた初歩的考察をこころみたい。

¹許建平「《俄藏敦煌文獻》儒家經典類寫本的定名與綴合——以第 11-17 冊未定名殘片為重點」（『姜亮夫・蔣禮鴻・郭在貽先生紀年文集（漢語史學報專輯）』2003。のち同氏『敦煌文獻叢考』（中華書局、2005）、『敦煌經籍叢錄』（中華書局、2006）所收。

一、釋文と書寫年代

(1) 釋文と配列

まず、各寫本の釋文を提示して、Dx17463 をはじめとする四種五個の寫本斷片が『淮南子』時則訓であることを確認し、あわせて各寫本が時則訓のどの部分に相當するかも提示する。なお、釋文中の各種の記號について、□は一文字分の判讀不能箇所、…は二文字以上の判讀不能箇所、()内は雙行注、／は雙行注での改行を示す。また『淮南子』のテキストは劉文典『淮南鴻烈集解』（馮逸・喬華點校、中華書局）による。

Dx236

- 01 …□□□度客（>胃□□□□／姦度索之也）斷刑
- 02 罰煞□罪阿上乱法者誅立冬之日
- 03 □□率三公九卿大夫以迎歲于北郊（北／□）

『淮南子』時則訓

（孟冬）大摻客、斷罰刑、殺當罪、阿上亂法者誅。立冬之日、天子親率三公九卿大夫以迎歲于北郊。

Dx3936

- 01 …□其…
- 02 味酸其臭羶…
- 03 始華（□陽／華也）田鼠…
- 04 （出化而為鴛／>生母鳥也）虹始見萍始…
- 05 天子衣青衣乘青龍□…
- 06 青旗食麥与羊服八□…
- 07 …

『淮南子』時則訓

（季春）其數八、其味酸、其臭羶、其祀戸、祭先脾。桐始華、田鼠化為鴛、虹始見、萍始生。天子衣青衣、乘蒼龍、服蒼玉、建青旗、食麥與羊、服八風水、

Dx7892

- 01 東□…
- 02 （>龍之／屬□）其音角（…／觸…）
- 03 其數八（木數三加□／五行改八也）其□…
- 04 其臭羶（>者陽□□／揚萬物也）其祀…

『淮南子』時則訓

(孟春) 其位東方、其日甲乙、盛德在木、其蟲鱗、其音角、律中太蕤、其數八、其味酸、其臭羶、其祀戶、祭先脾。

(仲春) 其位東方、其日甲乙、其蟲鱗、其音角、律中夾鍾、其數八、其味酸、其臭羶、其祀戶、祭先脾。

(季春) 其位東方、其日甲乙、其蟲鱗、其音角、律中姑洗、其數八、其味酸、其臭羶、其祀戶、祭先脾。

㊦x17463 I

- 01 (□□也□…／知採雷使□…) …
- 02 聲有不□…
- 03 (備有／暮也) 令官同□□□…
- 04 稱權槩(尺量尺丈也鈞…／斗甬量也端正也權稱□…)
- 05 无竭水澤无漉波池无
- 06 大事以□□…

『淮南子』時則訓

(仲春) 是月也、日夜分、雷始發聲、蟄蟲咸動蘇。先雷三日、振鐸以令於兆民曰、雷且發聲、有不戒其容止者、生子不備、必有凶災。令官市、同度量、鈞衡石、角斗稱、端權概。毋竭川澤、毋漉陂池、毋焚山林、毋作大事、以妨農功。祭不用犧牲、用圭璧、更皮幣。

㊦x17463 II

- 01 中其…
- 02 角律中…
- 03 羶其祀戶祭□□…
- 04 (華以陽／氣發生) 倉庚鳴(倉□□□陽…／類与氣相應…) …
- 05 鳩(鷹鷄也鳩布穀也／恒陽不發故化也) 天子…
- 06 龍服…

『淮南子』時則訓

仲春之月、招搖指卯、昏弧中、旦建星中。其位東方、其日甲乙、其蟲鱗、其音角、律中夾鍾、其數八、其味酸、其臭羶、其祀戶、祭先脾。始雨水、桃李始華、蒼庚鳴、鷹化為鳩。天子衣青衣、乘蒼龍、服蒼玉、建青旗、食麥與羊、服八風水、爨其燧火、東宮御女青色、衣青采、鼓琴瑟、其兵矛、其畜羊、朝于青陽太廟。

さて、㊦x7892 は時則訓の孟春・仲春・季春の三箇所に該當箇所があるが、結論から言えば、孟春に相當する。㊦x7892 の四行目にみえる「羶」は時則訓に三度登場するが、仲春に相當する ㊦x17463 II の三行目、季春に相當する ㊦x3936 の二行目にも「羶」が見えるからである。これによって、寫本の配列順も判明する。

子請已。於大丈夫白毫相中放一光明。此勝光明遍照三千大千世界。徹照萬佛刹已遍照寶住世界。彼諸菩薩摩訶薩見此光已。

ㄇx17463 Iv

01 …娑婆世界
02 …欲見汝聞所說法
03 …□□□見光相時
04 …□□□菩薩俱頂禮〈彼〉佛■
05 …□猶如力士屈申臂頃与万菩薩於彼
06 …□至娑婆界■住〈於〉空中為供佛故即
07 …〈其華香氣〉…大眾積至于膝是時
08 …□…

[T1490-1081b22~c2]

汝詣娑婆世界。彼釋迦牟尼如來及諸大眾。遲欲見汝聞所說法。時文殊師利白彼佛言。唯然世尊。已見光明。時文殊師利法王子即與萬菩薩俱。頂禮彼佛右邊三匝已。猶如力士屈申臂頃。與萬菩薩於彼世界忽然不現。至娑婆界住於空中。為供佛故即雨第一淨花。其花香氣普遍大眾積至于膝。是時大眾怪未曾有。而白佛言。世尊。是誰神力雨此妙花。

ㄇx3936v

01 …□
02 …世尊今此大眾渴仰
03 …□□唯願世尊聽
04 …有□□□恣□□問時寂調
05 …向文殊師利作是問言寶相如
06 …□法仁者樂彼文殊師利言天子〈彼所〉說
07 …□□□□貪欲故不為生瞋恚故
08 …□

[T1490-1081c13~c22]

是時寂調音天子白佛言。世尊。今此大眾渴仰欲聞文殊師利法王子所說妙法。唯願世尊。聽我少問。佛告天子。有所疑者恣聽汝問。時寂調音天子以恭敬心向文殊師利。作是問言。寶相如來世界以何說法仁者樂彼。文殊師利言。天子。彼所說法不為生貪欲故。不為盡貪欲故。不為生瞋恚故。不為盡瞋恚故。不為生愚癡故。不為盡愚癡故。不為生煩惱故。不為盡煩惱故。所以者何。

ㄇx236v

- 01 …
 02 薩不捨菩提心而化度眾生攝受□法…
 03 薩〈有〉慳成就檀波羅蜜天子言文殊師利頗□
 04 菩薩捨戒成就尸波羅…有天子…

[T1490-1085a27～b2]

天子言。以何方便。文殊師利言。若菩薩不捨菩提心。而化度眾生攝受諸法。是菩薩有慳成就檀波羅蜜。天子言。文殊師利。頗有菩薩捨戒成就尸波羅蜜不。曰有。天子言。以何方便。

『寂調音所問經』は一卷のみで、『大正新脩大藏經』第二四冊の1081～1086ページに相當するが、寫本の斷片が冒頭の1081ページに相當する箇所集中し、やや離れた1085ページ相當の箇所が一つ残るという状況は、表側の『淮南子』時則訓が孟春、仲春、季春に集中し、やや離れた孟冬が一つ残るという状況とシンクロする。よって、Dx236、Dx3936、Dx7892、Dx17463 I、Dx17463 IIは同一巻の寫本といえる。

Dx7892の背面が再利用されていないのは、再利用する段階でDx7892がすでに脱落していたのではなく、冒頭に若干の余白を残した上で、『寂調音所問經』を鈔寫したからだと思われる。また、Dx3936v一行目の後半には明らかに文字が記されておらず、改行されているのだが、残念ながらその理由はよくわからない。後考を俟つこととしたい。

(3) 形状と書寫年代

各寫本のサイズについて、Dx236のサイズについてはすでにメンシコフが言及しており、縦24.5cm、横5.0cmという³。その他の寫本のサイズについては、ロシア科學アカデミー東洋寫本研究所のポポワ所長によると、Dx3936が縦18.0cm×横13.0cm、Dx7892が縦17.0cm×横7.0cm、Dx17463 IとIIが縦19.5cm×横26.0cmとのことである。

これらは卷子本であったと考えられるが、Dx17463 I、Dx17463 IIのそれぞれ二行目から三行目にかけての破損箇所はうり二つで、この二つの寫本は重なり合った状態で破損したことがわかる。さらにDx3936の二行目から三行目にかけてもほぼ同じ形の破損箇所が見られることからすると、本稿で検討した『淮南子』時

³メンシコフの目録は中國語譯の『俄藏敦煌漢文寫卷敍録』(上海古籍出版社、1999)上册に據った。ちなみにメンシコフはDx236を「歴史經文、内容は懲治叛亂」(p574)、Dx236vを「文殊師利與某天子的談話」(p376)とする。

則訓一卷は『寂調音所問經』一卷として再利用され、巻物として保管されたまま破損したということになる。

紙質についてもメンシコフの言及があり、「紙質白、紙質厚」というが、『俄藏敦煌文獻』17冊所収のカラー圖版を見る限り、紙は染色されている。

書寫年代について、メンシコフは表、裏とも、5-6世紀のものとする。實のところこれ以上踏み込んだ言及は困難である。『淮南子』の字體は隸書の風格を残しており、書寫年代は五世紀を溯る可能性もあるが決め手に缺けると言わざるを得ない。背面に記された『寂調音所問經』が翻譯されたのは『大唐内典録』によれば「宋世不顯帝年」、すなわち劉宋（420～479）のいずれかという極めて漠然としたものである。よって早ければ五世紀中に『寂調音所問經』として再利用された可能性もある。ただ、隋・文帝の父の諱である忠と同音の中（Дx17463 IIv 五行目など）、および唐・太宗の諱である世（Дx3936v 二行目など）の避諱がなされていない点からすると、隋唐以前に『寂調音所問經』として再利用された可能性が高い。

ともあれ、本稿で検討した『淮南子』時則訓は、東京国立博物館所蔵の、隋唐鈔本とされる『淮南子』兵略訓よりもさらに古い寫本であることは疑いない。

また、メンシコフは Дx236 を「C.E. 馬洛夫珍藏」とする（上册 376 頁）。C.E. 馬洛夫とはマーロフ（C.E. Малов、1880～1957）のことで、ロシアのチュルク語學者である。彼は 1909～1911 年、1913～1914 年にかけて東トルキスタンで言語調査を行い、ウイグル文獻を中心とした多數の吐魯番文獻を蒐集した人物であることからすると⁴、『淮南子』時則訓の出土地は敦煌ではなく吐魯番ということになる。

二、内容の検討

(1) 本文

つづいて内容の検討にうつる。まず本文から。劉文典の『淮南鴻烈集解』本と文字の異なる箇所を列挙すると、

「蒼庚」→「倉庚」（Дx17463 II 四行目）

「毋竭川澤、毋漉陂池」→「无竭水澤无漉波池」（Дx17463 I 五行目）

「乘蒼龍」→「乘青龍」に（Дx3936 五行目）

「摻客」→「廋客」（Дx236 一行目）

「殺當罪」→「煞□罪」（Дx236 二行目）

⁴この條、高田時雄氏の情報による。

となる。一見してわかるように、これらの文字の異同によって文意が變化するわけではない。

この寫本の性格を考える上で重要なのは脱字である。背面に記されている『寂調音所問經』は挿入や塗りつぶしによる校勘のあとを残すが、結果として『大正新脩大藏經』所收のものと異なる箇所が殆ど無くなっている。しかしながら時則訓の方は字體も謹直で淨書された寫本であるが、明かな脱字が二箇所ある⁵。まず「令官市、同度量」となるべきところが、「令官同□□」（Dx17463 I 三行目）となっており、「市」が脱落している。もう一箇所は致命的で、「(角斗) 稱、端權概」となるべきところが、「…稱權槩」（Dx17463 I 四行目）となっていて、「端」が脱落している。この箇所には「尺量尺丈也鈞…／斗甬量也端正也權稱□…」という雙行注がつけられているが、この注釋を手がかりに以下の問題点を指摘することが出来る。雙行注の後半には「端正也」とあり、さらに「權稱□…」という注釋が続くが、これは劉文典『淮南鴻烈集解』本の「端權槩」に對應することはいうまでもない。しかし先述の如く、Dx17463 I の本文からは「端」が脱落しているので、雙行注は本文には存在しない文字を解説していることになる。これだけならば、單なる脱字という可能性もあるが、筆者は單純な鈔寫ミスではないと考える。その傍證となるのが、脱落した「端」の一字前に位置する「稱」である。

實は、この「稱」は「桶」の誤字であると王念孫が指摘している。王念孫は、『淮南子』時則訓と類似する内容をもつ『呂氏春秋』十二紀および『禮記』月令の該當部分がそれぞれ「角斗桶」「角斗甬」につくることから、『淮南子』時則訓も本來は「角斗桶」だったのであり、「桶」と「稱」の字形が近いが故に鈔寫のミスが生じた、と考えたのである⁶。

前章にて釋文を提示したように、Dx17463 I の本文には「角斗」の二文字こそ存在しないが、それに續く位置に記されているのは「桶」ではなく「稱」である。しかし雙行注には「斗甬量也」とあって、本來の『淮南子』本文が王念孫の指摘する如く——木偏の有無はあるが——「角斗甬」であったことを強く示唆している。「稱」と「桶」の書き間違いならともかく、「稱」と「甬」の書き間違いは容易に起こりえないであろう。先程の場合と同じく雙行注は本文に存在しない文字を解説しているのである。

⁵Dx236 の三行目も、本來は「天子親率」とあるべきだが、「率」の上に三字分のスペースはなく、脱字を想定しうる。ただし、どの文字が脱落しているかは不明。

⁶『讀書雜誌』卷九・淮南内篇第五「稱、皆當為桶。桶稱字相近、又涉注内「衡石、稱也」而誤。說文、「桶、木方受六升」。廣雅曰「方斛謂之桶」。斗桶為一類、故高注以桶為量器。若作稱。則非量器矣。月令作「角斗甬」、鄭注曰「甬、今斛也」。呂氏春秋作「角斗桶」、高彼注與此注同。史記商君傳「平斗桶」、義亦同也。下文仲秋之月「角斗桶」、桶字亦誤作桶」。

このような本文と雙行注がかみ合わない現象が生じた理由について、次のように考えるのが最も単純であろう。

『淮南子』に限らず、中國古代において注釋は獨立した單行本として存在した。すなわち『淮南子』の注釋を参照する際には、『淮南子』本體と注釋書を別々に広げる必要があった。そして、元來『淮南子』時則訓の本文には「角斗甬」と記されており、それにもとづいて「斗甬量也」という D_x17463 I に登場する注釋が作成された。しかし、『淮南子』本體の鈔寫が繰り返されるうちに、「甬」を「桶」に、さらにそれを「稱」に誤寫するテキストが主流となった。その後、本文中に注釋を挿入する形式が登場したことにより、『淮南子』も注釋を雙行注として本文中に挿入することが行われたが、その際、本文と注の校勘を行わないまま機械的に注を挿入したために、上述の如き本文と雙行注との乖離が生じたのだ、と。

ただし、この假定を成立させるためには、雙行注の作成者——同時に作成年代——が問題となる。節をあらたて検討したい。

(2) 雙行注

現在通行する『淮南子』は高誘の注釋本『淮南鴻烈解』と許慎の注釋本『淮南問詁』とが雜揉したもので⁷、通行本の時則訓の注釋は高誘のものである。本稿で検討した寫本に見える雙行注が高誘のそれと異なることは、時則訓・孟春の「律中太族、其數八」に付された高誘注が「其數八、五行數五、木第三、故曰八也」であるのに對し、該當箇所 D_x7892 三行目に「木數三、加□五行、改八也」と記されていることから明かである。では、注釋者は誰か、といえ、筆者は許慎と考える。『淮南子』の注釋者はなにも高誘・許慎の二名に限定されるわけではなく、馬融、延篤、應劭も『淮南子』の注釋を撰述しているが、許慎と考える利用のひとつとして、典籍資料に引用された許慎の時則訓注逸文と合致する箇所が存在する點を挙げたい。

D_x7892 の二行目の雙行注には「> 龍之屬□」とある。それに續く時則訓の本文が「其音角」であり、一行目冒頭に「東」が見えるので、一行目には「東方、其日甲乙、盛德在木、其蟲鱗」と記されていたことは疑いない。雙行注にしばしば見られる「>」は重文符號なので、「> 龍之屬□」は本文末尾の「鱗」をうけて、「鱗龍之屬□」と復元できる可能性が極めて高く、『文選』卷四五 宋玉「對楚王問」の注に引用された

⁷通行本『淮南子』二一篇のうち、原道・俶眞・天文・墜形・時則・覽冥・精神・本經・主術・汜論・說山・說林・脩務の十三篇が高誘注本、繆稱・齊俗・道應・詮言・兵略・人間・泰族・要略の八篇が許慎注本とされている。

淮南子曰、孟春月其蟲鱗。許慎曰、鱗、龍之屬也。

という許慎の時則訓注逸文と合致するのである（ちなみに高誘は「鱗蟲、龍為之長」と注する）。

この一点のみから雙行注の撰者を許慎と断定するのは早計と思われるかもしれないが、注釋のスタイルや傾向も許慎の『淮南子』注と合致する。

現行本『淮南子』が高誘注本と許慎注本の雜揉である論據として、注における音讀の有無が擧げられている。すなわち注に音讀を有するものが高誘注本、音讀のないものが許慎注本なのだが、本稿で検討した寫本の雙行注には音讀の箇所は見あたらない。

また、許慎『淮南子』注を分析された池田秀三氏は、許慎の注釋は高誘のそれに比べて非常に簡潔と指摘された⁸。ただし寫本中の雙行注と、對應箇所の高誘注の分量はさほど變わらない。むしろ孟春の「其臭羶」に付された「>（羶）者陽□□揚萬物也」（Dx07892 四行目）などは、高誘の「羶、木香羶」という注よりも多いのである。

しかしこの注釋も含めて、寫本中の雙行注は、池田氏が指摘するところの許慎注の内容的傾向、「陰陽五行や氣をもって説く條がかなり目につく」という點に合致すると筆者は考える。高誘注と比較してみよう。

まず上述の孟春「其臭羶」條の「>（羶）者陽□□揚萬物也」という注は判讀不能の箇所が多いものの、高誘の注が「羶、木香の羶なり」と、羶を羊の臭いではなく木の臭いと解説するのに對し、羶に對する訓詁すらなく、陰陽による解釋を提示しているものと想定することが出来る。

ついで仲春に相當する Dx17463 II の雙行注をとりあげよう。四行目の「華以陽氣發生」という注は前の行から續いている可能性はあるが、その後に續く本文が「倉（蒼）庚鳴」であることから考えると、「始雨水、桃李始華」に對する注であることは疑いない。「桃李始華」することによって「陽氣發生（あるいは「華は陽氣を以て發生す」と讀むのかもしれない）」するという注に對し、高誘は「冬の氷雪より春分の穀雨に至る。故に始めて水を雨らすと曰う。桃李是において皆な秀華するなり（自冬氷雪至春分穀雨。故曰始雨水。桃李于是皆秀華也）」と注していて、陰陽などおくびにも出さない。

ついで「倉（蒼）庚鳴」に付された注は「倉□□□陽…類与氣相應…」と判讀不能な箇所が大半を占める。しかし陰陽、あるいは氣にかかわる注釋と推測することはできよう。これに付された高誘の注は、（嚴密には高誘の注は「蒼庚鳴、鷹

⁸池田秀三「漢代の淮南學——劉向と許慎——」（『中國思想史研究』11、1988）

化為鳩」の後に挿入されているが、「蒼庚鳴」に對應するものは「蒼庚、爾雅に曰く、商庚・黎黃、楚の雀なり。齊人これを搏黍と謂い、秦人これを黃離と謂い、幽冀これを黃鳥と謂う。一説に斲木なり。此の月に至りて鳴く（蒼庚、爾雅曰、商庚・黎黃、楚雀也。齊人謂之搏黍、秦人謂之黃離、幽冀謂之黃鳥。一説斲木也。至此月而鳴）」であって、事物の解説に終始するのみである。

もう一つ、五行目に見える「鷹、鷓也。鳩、布穀也。恆陽不發、故化也」という雙行注は「鷹化為鳩」に對する注釋であるが、「鷹化して鳩となる」理由を「恆陽不發」に求めており、やはり陰陽にもとづくものといえる。それに對應する高誘の注は「鷹化して鳩となるは、正直を啄みて鷓搏せざるなり。鳩布穀を謂うなり（鷹化為鳩、啄正直不鷓搏也。鳩謂布穀也）」であって、陰陽とは關連しない。

季春に相當する ㄨx3936 の三行目には「(桐) 始華」に對して「□陽華也」とある。部分的に見える字形から判断して、おそらくこの箇所は「陽に隨いて華さくなり」と讀むのではないかと思われるが、それに對する高誘の注は「桐、梧桐なり。是の月華を生ず（桐、梧桐也。是月生華）」。やはり陰陽とは無縁のものなのである。

残る二つの寫本斷片には擧げうる注はないが、上記の五つの注からは、注釋者の陰陽や氣に對する強い關心を讀み取ることが可能であろう。

ただ、氣になるのが『說文解字』との關係である。白川靜氏は「許氏の五經異義と淮南子注とは、說文解字成立の上に、緊密な關聯をもつのである」と指摘しておられ⁹、また、池田氏によれば、『淮南子』許慎注に見える三百五十ばかりの訓詁のうち、六二條が『說文解字』の説解と一致し、約七十條が近似するという。

雙行注のうち訓詁にかかわるものと『說文解字』との關連を見てみると、近似するものとして「鷹、鷓也」を擧げることができる。『說文解字』には鷹という字形では収録されていない¹⁰。注目すべきは「鷓」の方で、鷓にはキジの意味もあるが¹¹、『說文解字』四篇上には「鷓、鷓鳥也」とあり、猛禽類と解している。現代日本語譯にすると「タカは猛禽類である」という、閒の抜けたことになってしまうが、『說文解字』の説解と近似するものとみなすことができよう。

また、『說文解字』の説解と一致すると思われる注に「> (鴛)、生母鳥也」(ㄨx3936 四行目)がある。「生母鳥」の意味はよくわからないが、この「生」は「牟」の誤記ではないだろうか。「鴛」は『說文解字』では「鴛」として収録されており(四篇上)、「鴛、牟母也」と説明されているからである。無論、こうした憶測は慎む

⁹白川靜『說文新義』卷一五(白鶴美術館、1973)、pp42~43。

¹⁰鷹は『說文解字』四篇上に「雁」という字形で収録されており、「雁鳥也」と解されている。

¹¹『爾雅』釋鳥「鷓雉、鷓雉、鷓雉、鷓雉、秩秩、海雉、鷓、山雉、韃雉、鷓雉、雉絶有力」。

べきであろうが、想定しうる可能性のひとつとして提示しておきたい。

前節において、中國古代では本文と注釋が別行していたことを述べた。曖昧な「古代」という表現を用いたのは、本文中に注釋をもりこむ形式を、いつ、誰がはじめたのか、確實なことはわからないからである。

本文と注釋の合併にかんして、古勝隆一氏は「馬融以前にこのような形式がまったく存在しなかったかどうかは證明できないが、その頃によく經と注が配合された注釋書の形式が現れてきたのではないかと考えられる」と述べておられる¹²。この馬融（79～166）の頃、というのもなんとも微妙な時期ではあるが、『說文解字』の成立が永元十二年（100）、許慎の『淮南子』注はそれよりも先行することは確實なので、許慎の『淮南子』注は『淮南子』本文と合併されていなかったと思われる。

いっぽう、後漢末の人である高誘の『淮南子』注は、自身が『淮南鴻烈解』序文に

時人の淮南を為す者少なきを睹、遂に凌遲せんとするを懼る。是に於いて朝鋪の事畢るの間を以て、乃ち深く先師の訓を思い、參うるに經傳道家言を以てし、其の事を比方し、これが注解を為り、悉く本文を載せ、并せて音讀を擧ぐ（睹時人少為淮南者、懼遂凌遲。於是以朝鋪事畢之間、乃深思先師之訓、參以經傳道家之言、比方其事、為之注解、悉載本文、并擧音讀）。

と記しているように、最初から本文と注が合併されていた。そして、魏晉以降において杜預の『春秋經傳集解』に代表される、本文と注釋を合併する形式が主流になる中で、許慎注も『淮南子』本文（しかも許慎が見たものとは別の系統のテキスト）に合併された結果、前節で述べたような、本文と注釋の乖離を生み出したのであろう。

おわりに

以上、極めて簡単ではあるが、Dx236、Dx3936、Dx7892、Dx17463 I、Dx17463 II が同一巻の『淮南子』時則訓であり、現存する最古の『淮南子』寫本であること、出土地が敦煌ではなく吐魯番であること、また雙行注が許慎のものであること、ならびに背面が『寂調音所問經』として隋唐以前に再利用されたことについて論じ

¹²古勝隆一「後漢魏晉注釋書の序文」（『東方學報』73、2001）、のち同氏『中國中古の學術』（研文出版、2006）所収。

た。しかし、各寫本が零細な斷片ということもあって、指摘しえた點は甚だ些末なものと言わざるを得ない。御叱正頂ければ幸いである。